

令和元年 8月 7日

人間発達文化学類佐久間康之教授ならびに高木修一准教授が 小学校英語教育学会 (JES)「学会賞 (研究論文)」を受賞

人間発達文化学類の佐久間康之教授と高木修一准教授による共著の研究論文が令和元年 7月 21日(日)に小学校英語教育学会 (JES) の学会賞を受賞しました。

【受賞概要】

令和元年度 小学校英語教育学会 (JES)「学会賞」

研究論文：『小学 6 年生の言語性短期記憶における音韻認識と音声産出の特徴』
佐久間康之・高木修一

2020 年度から施行される学習指導要領では、高学年で英語が教科（「外国語科」）として年間 70 時間実施されます。外国語科では、文字言語への慣れ親しみに加え、音声言語として語彙や文法知識の習得が求められます。児童が音声言語として語彙を習得するには、語彙の音韻を正しく認識すると同時に、正確な音声として産出できるようになる必要があります。すなわち、聞き取った語彙を瞬時にかつ正確に音声化し、復唱を通して音韻情報を知識として記憶すること、そして記憶した語彙の音韻情報を活性化して、音声情報として構築することが求められます。この言語情報の記憶と再生に不可欠な反復と活性化は、ワーキングメモリ (working memory) 内の言語性短期記憶によって支えられています。言語性短期記憶とは、一時的に言語情報を保持する役割を担う短期記憶であり、母語および外国語における語彙習得に大きく関わっていると言われています。

本研究は、小学校で英語の音声に慣れ親しんでいる児童が音声言語として語彙を習得するメカニズムについて、認知心理学の記憶研究に基づく実験調査を行った基礎研究です。本研究の意義（独創性）は、日本人児童の音韻認識と音声産出のプロセスに分けて検証した点にあります。言語性短期記憶の観点から日本人児童の言語習得メカニズムを検証した研究はありましたが、そのほとんどが、音韻認識における音声産出における活性化と構築までのプロセスを一括りに扱っており、発音（音声産出）はできないものの、単語内での音の並びを聞いて分かる（音韻認識）までは達している習得段階については検討が不十

分でした。

研究対象は、英語を日本の公立小学校で約2年間学習した6年生107名と91名です。研究方法として、児童に英語の非単語反復課題（英語に似た音韻構造で実在しない音韻情報を1度聞いて、その直後に繰り返し発音する課題）に取り組みせ、それぞれから音韻認識と音声産出のデータを収集しました。非単語の音節数および子音連結が音韻認識と音声産出に与える影響を検証するため、一般化線形混合モデルによる分析を行いました。結果として、非単語の音節数の増加は音韻認識と音声産出の両方を阻害した一方で、非単語に含まれる子音連結数の増加は音声産出のみを阻害し、音韻認識には影響しませんでした。このことから、日本人児童にとって音節数の多い単語の学習は音韻認識の段階で困難であるのに対し、子音連結の多い単語の学習は音韻認識の段階ではなく、音声産出の段階で困難が生じる可能性が示唆されました。

今後も言語性短期記憶の視点から基礎研究を行い、研究の成果が教育や研究に携わる関係者の長期記憶に残るように精進して参りたく存じます。

【小学校英語教育学会（JES）について】

小学校英語教育学会（JES）は、「小学校における英語教育の理論と実践を研究し、小学校英語教育の発展に寄与する」ことを目的として、2000年に発足した学会です。会員数は一般会員、賛助会員、学生会員、団体会員あわせて約700名からなる全国組織の大規模な学会です。

【学会賞について】

今回受賞した研究論文部門での「学会賞」は、年1回発行される学会誌（JES Journal）に掲載の研究論文のうち最優秀の論文1報に与えられるものです。この度の論文は2019年3月に発行のJES Journal Vo.19に掲載されています。学会賞の選出は、各関係者の持ち点により、2つの段階を踏んで厳正に行われました。第一段階として複数の査読委員が採点を行い、その結果を受け、第二段階として複数の学会賞選考委員が再審査による採点を行い、双方の総合点で最高得点が与えられ、今回の受賞となりました。

（お問い合わせ先）

人間発達文化学類 教授 佐久間 康之

電話：024-548-8149

メール：ysakuma@educ.fukushima-u.ac.jp